

地方都市における 水系基盤の調査とその都市史的考察 － 防府 乙井手水路を例に－

坂口 源¹・中井 祐²

¹非会員 東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻 修士課程 (〒113-8656 東京都文京区本郷7丁目3番1号, E-mail:sakaguchi@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 工博 東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻 准教授 (〒113-8656 東京都文京区本郷7丁目3番1号, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

水路や運河といった水系基盤は、近代以前には地方都市の形成発展の歴史に深く影響していたが、特に戦後の都市形成では、無駄なものとして覆い隠されてきた。本論文では、文献調査・フィールドサーベイ・インタビューを通して、山口県防府市の乙井手水路の成り立ちと現況を調査し、水系基盤と都市の成立史との関係を明らかにするとともに、過去の乙井手水路と生活との関わりについて、具体的な記録・記述を蓄積し、分析した。

キーワード: 地方都市, 水系基盤, まちづくり, 農業用水, 防府, 乙井手, 水路, 迫戸川, 天神筋

1. はじめに

水は生存に不可欠なものである。そのため、かつて人々の生活は水と深い関係にあり、近代以前の日本では、水系基盤が都市の形成発展の歴史に深く影響していたと考えられる。しかし、近代、特に戦後の都市形成では、こうした都市の水面や、水と関わる微地形の存在は無駄なもののみなされ、道路と建築によって覆い隠されてきた。また、こうした全国一律の都市形成手法の普遍的な性格が、全国の地方都市の市街地景観を、画一的で個性に乏しいものにしてきた面があることも否めない。

一方、現代の地方都市の中には、例えば倉敷・近江八幡・柳川・海野宿など、忘れ去られつつあった過去の水系基盤を活かして、独自の魅力を持つ地方都市としての地位を築き上げた例も多くある。

こうした状況を鑑みるに、今後の地方都市におけるまちづくりでは、都市の表層の下に今も眠る、忘れ去られつつある水系基盤を見直し、水系を中心としたまちづくりを検討する意義は大きいのではないだろうか。

そこで本論文では、山口県防府市の乙井手水路を例として、水系基盤と都市との関係を具体的に調査し考察するとともに、歴史研究としての側面から、調査の記録を蓄積し、今後の研究やまちづくりのために参考となる資料を提供することを目的としている。

2. 対象と研究の手順, 調査の概要

(1) 対象地の概要と選定理由

山口県防府市の2つの旧市街である宮市地区と三田尻地区を南北に結ぶ天神筋と、それに沿って流れる乙井手水路を対象とする。図-1に対象地の概略図を示す。

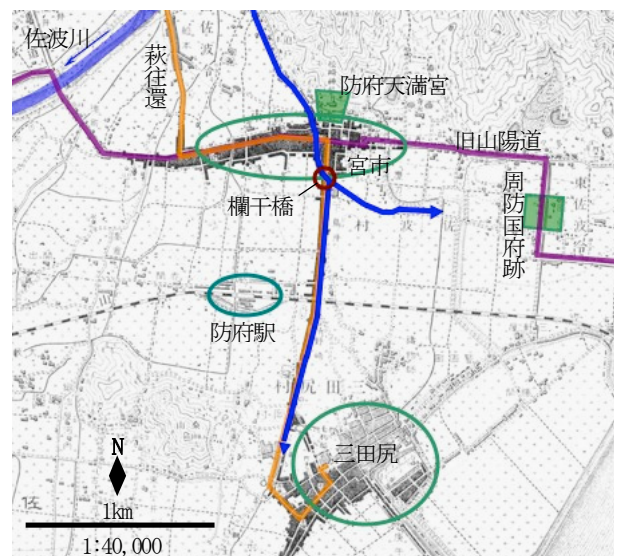


図-1 対象地の概略図。

a) 防府市について

1級河川佐波川の下流に開け、周防灘を望む平野の段

丘上を中心として市街が形成されてきた¹⁾。また古代より、京と太宰府を結ぶ大幹線である山陽道がこの地を東西に通る、地の利を活かして、周防の国府や天満宮が置かれ、朝廷による地方統治の拠点となった。

中世から近世にかけては、大内氏、毛利氏の統治下で、天満宮の門前市にあたり商業地となった宮市と、港湾地区であり大内水軍・毛利水軍の軍港として利用された三田尻という、ふたつの核を中心に発展した。さらに江戸時代には、毛利氏によって、日本海側の藩都萩と、瀬戸内海側の山陽道や軍港三田尻を結ぶ南北の幹線道路として萩往還が整備され、この萩往還と山陽道との交差点にあたる宮市は、参勤交代に際して宿場を提供するなどして大いに繁栄した。

近代に入り、三陽鉄道（現・JR 山陽本線）が宮市と三田尻の中間を東西に通ると、市街地は徐々に駅周辺へと拡大し、現在では駅周辺が中心市街地となっているが、旧市街には今でも様々な時代の遺構が点在し、往時の栄華を偲ばせる。

b) 天神筋の乙井手水路沿いの地区について

乙井手水路は、中世から現代に至るまでの防府の核となってきた市街地の中を貫流し、近代には県下有数の繁華街であったという天神筋商店街の中を悠然と流れていたと言われている、非常に独特の性格を持った水系基盤であった。しかし、昭和13年から16年にかけてその主要部が暗渠化されてしまい²⁾、現在は水路と周辺市街との関係は断たれてしまっている（図-2）。また、支線まで含めた水路網の詳細な現況を示す資料は存在しない。以上のことから、今後のまちづくりに向けたモデルとしての意義もかねて、水系基盤と都市との関係を調査・考察する対象として適している。



図-2 現在の天神筋の様子（筆者撮影）。

なお、本論文で扱う水路の正式名称は乙井手水路であるが、その上中流部は地元では通称、迫戸川と呼ばれており、本論文中でも、場合に応じてこの2つの名称を適宜用いていることを先に断っておく。

(2) 研究の手順

まず、文献調査・フィールドサーベイ・インタビューによって、乙井手水路の過去の姿やその変遷、ならびに現況に関する資料・情報を収集した。特に、対象地内の水路網の詳細な現況を視覚的に把握することのできる資料として、調査によって得られた情報を総合して独自の水系図を作成した。そして、これらの結果をもとに、水路と都市の成立経緯を分析し、また過去に水路と人々の生活とがどのように関わっていたかを考察した。

(3) 現地調査の概要

本研究では、2回に分けて、のべ9日間にわたって現地での調査を行った。表-1, 2にその日程を示す。

表-1 第1回調査の日程。

年月日	時間	調査内容	場所・対象	天気
2007.11.11(日)	15:00-17:00	資料収集	山口県文書館	晴れ時々曇り
2007.11.12(月)	11:30-12:30	資料収集	防府市立防府図書館	曇り時々雨
	13:00-17:30	資料収集・インタビュー	防府市役所、防府土地改良区	
2007.11.13(火)	10:30-12:00	インタビュー・資料収集	松崎公民館	晴れ時々曇り
	13:00-17:30	フィールドサーベイ・インタビュー・資料収集	総合堰～欄干橋	
2007.11.14(水)	10:00-17:30	フィールドサーベイ・インタビュー・資料収集	欄干橋～南へ、三田尻病院、向島まで	晴れ
2007.11.15(木)	10:00-15:00	フィールドサーベイ・インタビュー・資料収集	欄干橋～東へ、国衙、毛利邸まで	晴れ

表-2 第2回調査の日程。

年月日	時間	調査内容	場所	天気
2008.01.15(火)	10:30-17:00	フィールドサーベイ・インタビュー	宮市～天神筋～三田尻	晴れのち曇り
2008.01.16(水)	10:00-16:52	資料収集	防府市立防府図書館	雨のち曇り
	17:00-19:00	インタビュー	天神ピア、コア天神など3カ所	
2008.01.17(木)	10:00-17:30	インタビュー・資料収集	天神筋商店街など7カ所	晴れ
2008.01.18(金)	10:00-12:00	インタビュー・資料収集	市内の個人建築設計事務所	晴れ
	14:00-16:30	資料収集	山口県文書館	

2回の調査で計35名に対してインタビューを行い、79種類の資料を収集した。

開渠／暗渠の別、水流の方向を示すとともに、等高線を重ねることにより、水路・街路と微地形との関係を視覚化した。これによって、以下のことが明らかになった。

3. 乙井手水路の現況

まず、現地調査によって判明した水路の詳細な現況を、以下に示す水系図（図-3）としてまとめ、水路の分布と

(1) 水路の分布と開渠／暗渠などの状況

まず、公的機関によって把握されている幹線水路以外に、そこから分岐した多くの支線水路が、市街地の裏通りを毛細血管のように流れていることがわかる。中心市街

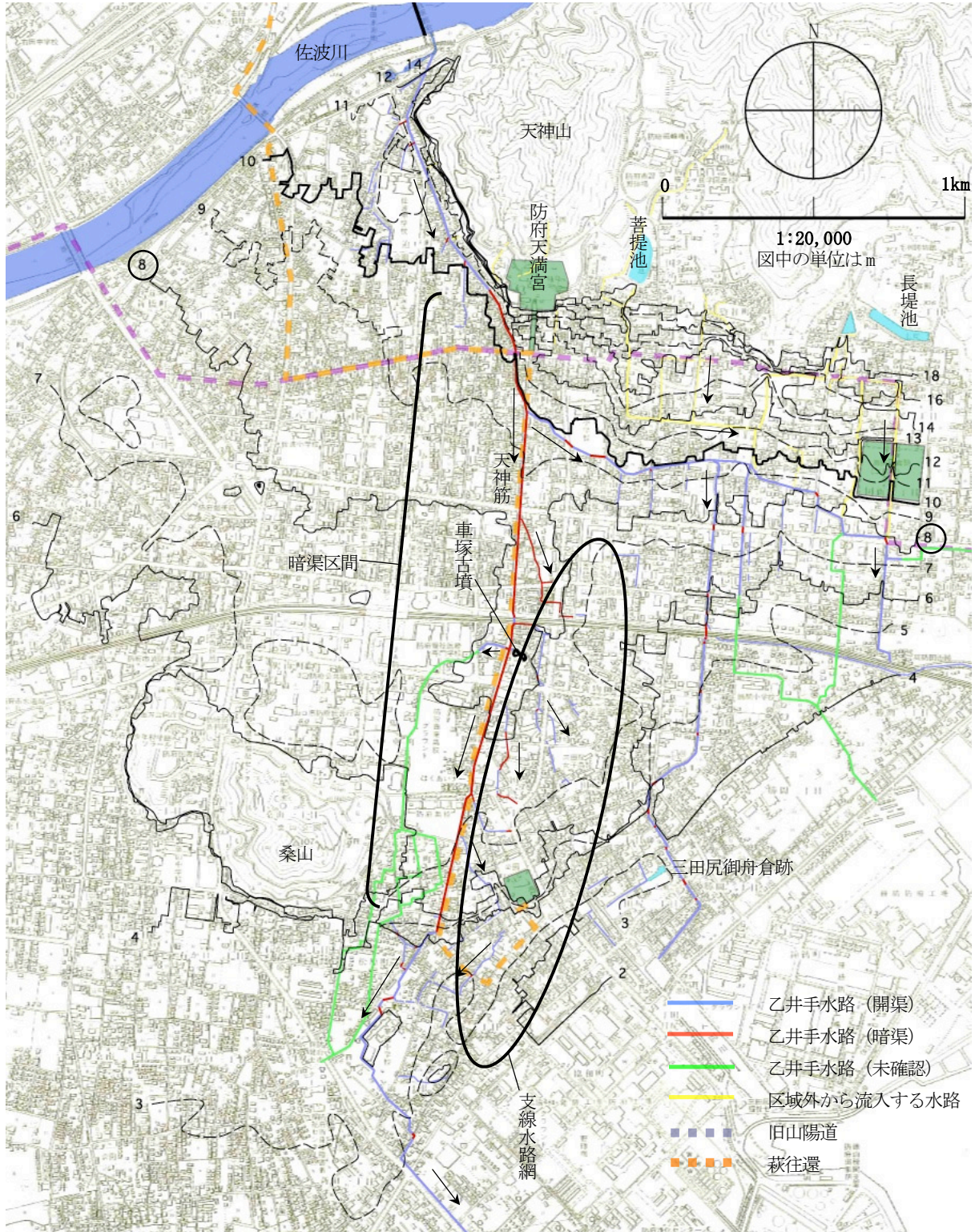


図-3 水系図（筆者作成）。

地では水路の大部分が暗渠化されてその存在が隠されてしまっているだけでなく、支線水路が開渠となっている場合でも、幹線水路からの分岐部分が暗渠化されている場合が多く、一見、水路の一部であることがわからない、どこから流れてきたのか不明な溝の切れ端が市街地の裏通りに取り残されていることが明らかとなった。

これらの支線水路の詳細な分布や開渠状況を地図上に記した資料はなく、本研究独自の成果である。

(2) 水路・街路と微地形との関係

次に、水系図中の等高線は1m 間隔で、水路・街路と微地形との関係を示すものである。

乙井手水路と萩往還の街道は防府天満宮の表参道にあたる天神筋を一对になって南下しているが、この天神筋でのみ、8m の等高線が大きく800m ほど南に長靴状に張り出し、水路と街路はちょうどこの微高地の尾根筋をたどっていることがわかる。また、欄干橋より分岐して東に向かう水路も、等高線と垂直に低地に向かって流れ下るのではなく、ほぼ10m の崖線に沿って流れ続けていることがわかる。

なお、水系図の作成にあたっては、防府市の1万分の1都市計画図白図³⁾をベースとし、幹線水路については『防府市 用排水路系統図』⁴⁾・『市街地用排水路 位置図』⁵⁾に描かれた水路を参考に、調査によって判明した部分の開渠/暗渠の別や流れの方向を示している。また支線については、調査で存在が判明した部分についてのみ、その分布と開渠/暗渠の別、流れの方向を示している。等高線については、偶数値の等高線（実線で示す）は2千5百分の1都市計画図白図⁶⁾に描かれた等高線により、奇数値の等高線（破線で示す）は、都市計画図白図に描かれた補助等高線ならびに標高点によった。

4. 史的観点からの考察

(1) 水系基盤と都市の成立について

a) 地形の分析

ここで、前述の水系図における天神筋の尾根の張り出しについてより仔細に観察すると、この微高地上に6世紀の建造と推定されている車塚古墳という前方後円墳が地層に埋もれずに現存することから、遅くとも古墳時代後期には、この微高地が存在していたことが推察される。

さらに、天保11年（1840年）の『三田尻宰判洪水損処略図』⁷⁾では、佐波川の洪水による浸水範囲が、桑山の西、ちょうど現代の6m 等高線あたりより低いところに限られていることがわかり、このことから、広い範囲で天神山と桑山を結ぶ、陸繋砂州状の微高地の存在が

示唆される。

以上のことから、まず、天神筋の水路は、低地へ一気に流れ下るのではなく微高地の尾根筋を辿って流れているのであるから、この南北の流路自体は人工のものであると考えられる。また微高地の尾根筋に幹線水路を通し、そこから支線を分岐させて左右の低地に分水するという、広範囲に給水する必要のある農業用水として非常に合理的な流路設計がなされていることが判明した。さらに、萩往還という重要な参勤交代道の一部をなす天神筋の道筋についても、微高地の尾根筋を選んで設定されていることが判明した。

これらの知見を総合すると、この天神筋の南北の軸線は、農業用水と参勤交代道という、非常に重要な2つの基盤施設の幹線として選ばれており、防府の都市の中で、特別な位置を占める地形的要素であったといえる。

b) 近代以前の記録の分析

近代以前の文献に乙井手水路と思われるものが初めて現れるのは、応長元年（1311）に制作された『松崎天神縁起』の第6巻⁸⁾においてであり、松崎天神（現・防府天満宮）への参道が迫戸川と推測される小川を渡る様子が描かれている。ただし、この絵図には水路周辺の様子がほとんど描かれておらず、また絵図全体がかなりの程度デフォルメされていることから、これをもって鎌倉時代にすでに欄干橋のあたりまで流路が確定していた根拠とするには弱いだろう。

次にこの水路が登場するのは、応安4年（1371年）、九州探題として下向する途上、大内氏配下の防府を訪れた今川了俊の紀行文『道ゆきぶり』⁹⁾¹⁰⁾においてであり、「佐波川から分かれ、酒垂山（天神山）の西麓を廻って天神の祠前を流れているため、この川を御手洗川と呼ぶ」という記述があり、これは現在の乙井手水路上流部の、迫戸川と呼ばれる部分の流路に一致する。また、「天神の前の作道は20余町ばかり、浜辺まで見通すことができ、その間に鳥居が2基立っていた、みたらし川が道に沿って流れており、橋がかかっていた」という内容も明記されていることから、すでに室町時代の初めには、天神筋を道に沿って南下する現在の流路が存在したことがわかる。記述は極めて具体的、記録的であり、これをもって乙井手水路に関する記述の初出とするのが妥当であろう。またここでは、水路が当時「御手洗川（みたらしがわ）」と呼ばれていたことや、前述の、地形的要因による明快な軸線の存在が、当時すでに認識されていたことも確認できる。

絵図に描かれた乙井手水路がはっきりと確認できるのは近世に入ってからで、本研究では以下の7点の絵図を確認することができた。いずれも毛利氏の藩政文書であるが、正確な年代については特定されていないものもあ

る。

- ・『地下上申絵図 防府佐波令清図(写)』¹¹⁾ 享保5年(1720年)一宝暦5年(1755年)ごろ
- ・『御国廻御行程記』¹²⁾ 江戸時代(18世紀後半)
- ・『三田尻宰判洪水損処略図』¹³⁾ 天保11年(1840年)
- ・『防長風土注進案』¹⁴⁾ 天保12年(1841年)
- ・『佐波郡三田尻宰判絵図』¹⁵⁾
- ・『三田尻惣絵図』¹⁶⁾
- ・『三田尻宰判略図』¹⁷⁾

これらの絵図を比較すると、少なくとも幹線水路に関して、江戸中期には現在の流路がほぼ確定していたことがわかる。一方、支線水路に関しては絵図によって異同があり、一定していなかった。

いずれの絵図においても、市街地は宮市では主に山陽道に沿って分布しており、三田尻では主に萩往還沿いと、毛利氏の軍港である御舟倉周辺に分布している。一方で、欄干橋より南の萩往還沿いにはほとんど家屋がなく農地が広がっており、乙井手水路の農業用水としての性格が確かめられるとともに、近代以前の防府において水路そのものを基軸として市街地が発展したという仮説は成り立たないこと、幹線水路の分岐点である欄干橋が市街地と農地の境界となっていたことが明らかとなった。

c) 近代以後の記録の分析

近代に入ってから、全国的に整備された実測に基づく地形図によって、同地の様子を見ることができる。明治32年(1899年)測図2万分の1地形図「三田尻」(図-4)では、前年に開通したばかりの三陽鉄道(現・JR山陽本線)と三田尻駅(現・防府駅)が描かれ、近代以前との明確な違いとして、市街地が駅前から天神通りへ接続し宮市、三田尻を結ぶ萩往還沿いにも張り付いていることがわかる。鉄道の開通による天満宮への参拝客の交通が天神筋の商店街の成立要因となったという『防府市史』の記述¹⁸⁾が裏付けられるとともに、この古くからの南北の軸線を端緒として、近代初期における防府の商業都市への転換が始まったことがわかる。

また、昭和2年測図(図-5)以降に作成された7点の2万5千分の1地形図からは、水路周辺の市街地の変遷を読み取ることができる。昭和2年には既に天神筋の西側に並行して、駅前から宮市へ貫通する栄町、恵比須町(現・戎町)の両商店街が形成され、これら3本の南北の商店街を核として裏通りが徐々に形成されるとともに、水路沿いの農地が減少していったことがわかる。こうした市街地の拡大に伴う農地の減少は、農業用水であった乙井手水路にとって致命的な影響を及ぼしたと考えら



図-4 明治32年測図2万分の1地形図「三田尻」(部分)、40%に縮小。



図-5 昭和2年測図2万5千分の1地形図「防府」(部分)、50%に縮小。

れ、商店街の発達と水路の暗渠化は軌を一にしていたという『防府市史』の記述¹⁹⁾が確かめられる。

(2) 水路と人々の生活との関わりについて

近代以前の文献や絵図からは、水路が舟運や防衛などの、農業用水以外の用途に使われていた証拠は発見できなかった。また、防府が一大商業地に変貌をとげた近代以後についても、水路が基本的には農業用水であり続け、舟運などには用いられなかったことが、インタビューなどから明らかになった。なお、この水路は、現在でも一部で農業用水として使用されていることも判明した。以上のことより、少なくとも防府の場合、水路そのものを直接的

要因として市街が形成発展してきたとは言えない。

一方、インタビューでは、非常に多くの対象者が、水路を補助的な生活用水として洗い物などに用いていたことや、子供の頃に水路で泳いだり釣りをして日常的に遊んだことを証言しており、人々にとって非常に身近な水面であったことが確かめられた。

さらに、インタビュー対象者から提供された写真（図-6）には、暗渠化される以前の天神筋の水路がはっきりと写っており、水路の形態や規模、街路や人との距離関係などを知ることができる。繁昌する防府の目抜き通りの風景の一部として、水路が確かに存在し、街と共存していた姿をはっきりと確かめられ、極めて貴重である。



図-6 昭和初期の乙井手水路の様子。

5. まとめ

(1) 本論文の成果

本論文ではまず、文献調査・フィールドサーベイ・インタビューを通して、これまで把握されていなかった水路の詳細な現況や水路・街路と地形との関係を明らかにするとともに、これらの調査の結果を蓄積することにより、今後の研究およびまちづくりに参考となる基礎資料を提供した。

次に、水路と周辺市街の成立を、主に史的観点から考察し、その結果、水路が都市形成の直接的要因とはならないまでも、地形的要因に対して合理的に設計された水路と街道によって、都市の生成発展の歴史にとって非常に重要な軸線が構成されていたことを明らかにした。

このことは、より大局的には、一見無秩序な現代の都市の表層の下に積み重ねられてきた、その都市の成立に関わる潜在的な秩序や構造が、水系基盤の存在によって顕在化する例を示したものであり、今後の日本の地方都市における水系を活かしたまちづくりに、いくばくかの示唆を与えるものと考えられる。

さらに、水路と都市の営みや人々の生活との関わりを

分析し、その結果、防府における水路が、その基本的性格を農業用水としながらも、人々が日常的に手に触れられる身近な水面を提供していたことを明らかにした。

(2) 今後の課題

以上のような本論文の具体的成果をふまえた上で、今後の課題としては以下のことが挙げられる。

まず、本論文では主に都市的スケールにおいて水系基盤と都市との関係を俯瞰してきたが、より小さな、街路や建築のスケールにまで立ち入って、こうした水系基盤の存在が実際の風景の見え方にまで与える影響をより詳細に調査・分析することで、今後のまちづくりの場で、水路と街との関係をいかに形づくり、現実のデザインに反映すべきかを考える手がかりが得られる可能性がある。

また、他の地域や都市との比較研究を行うことで、よりそれぞれの都市の持つ個性が明確になるものと思われる。

謝辞：本研究では、多くの方々から資料や情報を提供していただき、また数々のご助言をいただいた。この場を借りて厚く謝意を表す。

参考文献

- 1) 防府市教育委員会：周防の国府跡 1970～80年代の発掘調査結果から、pp. 14, 1990
- 2) 防府市史編纂委員会：防府市史 通史III 近代・現代、pp. 655, 1998
- 3) 防府市河川港湾課：防府市 用排水路系統図 1万分の1、1982ごろ-1994ごろ
- 4) 防府市 都市計画図白図 1万分の1
- 5) 市街地用排水路 位置図、防府土地改良区提供、1982ごろ-1994ごろ
- 6) 防府市 都市計画図白図 2千5百分の1
- 7) 三田尻宰判洪水損処略図、山口県文書館蔵、1840(天保11)
- 8) 小松茂美：続 日本の絵巻2 2 松崎天神縁起、pp. 62-63、中央公論社、1992
- 9) 松崎歴史同好会：史跡探訪（宮市～迫戸地域）、松ヶ崎創刊号、pp. 21-22, 1994
- 10) 平凡社編：山口県の地名 日本歴史地名大系3 6、平凡社、1980
- 11) 地下上申絵図 防府佐波令清図（写）、山口県文書館蔵、1720(享保5)～1755(宝暦5)ごろ
- 12) 御国廻御行程記、山口県文書館蔵、江戸時代(18世紀後半)
- 13) 三田尻宰判洪水損処略図、山口県文書館蔵、1840(天保11)
- 14) 山口県文書館編：防長風土注進案、マツノ書店、1983
- 15) 佐波郡三田尻宰判絵図、山口県文書館蔵、年代不明
- 16) 三田尻惣絵図、山口県文書館蔵、年代不明
- 17) 三田尻宰判略図、山口県文書館蔵、年代不明
- 18) 前掲2)、pp. 655
- 19) 前掲2)、pp. 655